

ウルフとゴールズワージー

大林 幹明

I

エドワード朝時代の小説について、一般論としてその傾向を述べると、様々な言い方が可能ではあろうが、一例として、「現今では、あまり読まれていないし、読まれても、それは時代のある側面を知るために読まれる。」というような言い方が、まず浮びあがってくる。もっとも一口にエドワード朝時代の小説といっても、Rudyard Kipling(1865-1936), Joseph Conrad(1857-1924)を始めとして、Arnold Bennett(1867-1931), John Galsworthy(1867-1933), H. G. Wells(1866-1946), そして、F. M. Forster(1879-1970)等々、多岐にわたる作家がいて、一般論として一言で言いつくすこと自体が困難なことは否定できない。例えば前記諸作家のうち、Kiplingの場合を考えてみればそのことは一目瞭然である。1987年、Oxford出版局から彼の作品数点が出版の運びとなり、時を同じくしてPenguin Booksの方からも、重複する作品も含めて同様の企画が実行された。のみならず、彼に関する研究書も出て話題をまいたりしていることを考えれば、彼の作品が読まれないとは言い難いことになる。もっとも彼の場合は、エドワード朝の小説家といっても、多少異なる点もあるし、一概に彼の例をもって全般を論ずる、あるいは反論とするにはふさわしくないとも言えよう。

研究対象としてよくとりあげられるので、決して読まれたいわけではないという点から言えば、Conradについても同様であろう。彼の場合も論じられるときは、この時代の作家として扱われることが多いと考えられる。しかしその場合研究の対象として注目されるのは、やはり彼の作品が、というより彼の作

家としての経歴その他が若干傾向を異にするという事情があることを考えれば、例外とは言わないまでも、多少は他と異なる扱い方が考えられるのは理にかなってしよう。

このように考えてくると、一般論としてエドワード朝時代の小説家という場合、Bennett, Galsworthy, H. G. Wells の3人がすぐ頭に浮ぶことになる。そしてこの三人が、あたかもこの時代を代表する小説家であるとの印象を与えることになる。しかし例えば、作品の本質とははずれるという批判は生ずるとしても、Kipling がノーベル賞を得たのが1907年であるのに対し、Galsworthy の場合は、1932年であるということを考えると、前記三人があたかも代表のように考えるのは、事実誤認であるということも言えなくはないし、当然 Forster を除外しては本質を見失しなうと指摘されれば、それもまた一理あると思えるのは如何ともしがたい。しかしそれにもかかわらず、前記三人で代表させるのはあながち不当なことであるとも言えないだろう。

思うに、エドワード朝作家という三人を思い浮かべるのは、Virginia Woolf (1882-1941) が1924年に発表した評論、“Mr. Bennett and Mrs. Brown”にその原因の一端がある。これについては後に詳しくふれるが、彼女がこの中で、物質主義者であると言って攻撃したのがほかならぬ三人であったことはよく知られた事実といていい。しかもこの評論の中で、彼女は Forster を Georgian の一人に数えている。Woolf の Forster に対する批判は、エドワード朝小説作法に妥協したとして必らずしも芳ばしいものではないけれども、他方においては、前記三人とは一線を画するところがあり、明きらかに区別しているという事情も加味する必要はある。もっとも彼と同じに扱われている D. H. Lawrence (1885-1930) については当然として、彼女が Forster を除いたについては、若干疑問が残るのは、彼の *Where Angels Fear to Tread* から *Howards End* にいたる四作はすでに1910年までに書かれていたからで、彼を Georgian と呼ぶのは無理がある。彼は立派なエドワード朝時代の小説家なのである。逆に Galsworthy について言えば、彼のいわゆる Forsytes Chronicle の最後を構成する *Over the River* が1932年であることを思えば、Forster は

彼以上にエドワード朝の作家でなければおかしい。しかしそれにもかかわらず3人が思い浮かび、彼らに落着くのはそれなりに妥当な線だといえる。

Woolf が先の評論を書くにあたっては、例えば次の事情も考慮する必要はあろう。“For any young writer in the 1920s there was a feeling that Bennett was governing the literary market by his prestige and influence as a reviewer”⁽¹⁾ その頃の文壇に大きな勢力を有していたのが、Bennett を先頭とする人々であったということは十分考えられることであるし、彼らが、“a major obstacle” にみえたことから、それだけ彼らに対する攻撃が強くなったとしても、それは当然といえども当然と言わざるを得ない。その結果三人が典型だと見られるのは論理としては筋が通っている。

ところで、G. S. Fraser が、*The Modern Writer and His World* のなかで、1900～1910年の小説の傾向について、一括してこの時期を、“Indian Summer”と呼んでいる。この時期の作家として彼が扱っているのは、Galsworthy と Bennett を始めとして、Conrad, Kipling を加え、知的な小説家の代表として Forster を論じているが、Wells については、Henry James とともに、その前章で20世紀小説の先駆として考えているので、Wells をエドワード朝作家と同列に論じない点で Woolf とは微妙な差が出ているのが面白い。この Indian Summer という呼び方それ自体は、この時期を示す標題としては、なかなか要点をついた見方であるように思える。というのも、その前10年はいわゆる世紀末ということで、何かと話題の多い時代ではあるし、1920年代がまた様々な新しい試みの作品が登場したにぎやかな時代で、Fraser 自身も“Gay 1920s”と呼んでいるなど、興味ある期間であったことは、文学史上よく知られたことであるのに対し、1900～1910年は別の言葉で言えば、Air Pocket に入ったような印象を与える時代であって、その意味からもこの時期の作家作品について注意が注がれにくくなるという事情は考えられるし、Indian Summer というようなことで一括されると、いかにも変化のない穏やかな印象を与えてしまう。

実際この時期の小説、特に Bennett の *Clayhanger*, Galsworthy の *Forsyte Saga*, Wells の *The New Machiavelli* などについて、Edwin Muir はこれ

らの小説を Period Novel と規定した後，“It [Period Novel] does not try to show us human truth valid for all time; it is content with a society of a particular stage of transition, and characters which are only true in so far as they are representative of that society.”⁽²⁾と書いているように、どうも、この時期の作品が、いま一步普遍化が不足していて、広い真理を描ききっていないことになる。このことは、エドワード朝時代の作品が読まれるとき、少くとも最近においては、小説そのものを読むというよりは、これらの小説からある時期のイギリス社会の態様を読むために読む、そしてそのためには、これらの作品は非常に都合のよい作品であるというような傾向を示す一つの手がかりにはなるはずである。例えば、Galsworthy の作品には、Upper Middle あるいはもう少し広げて Upper Class までのこの時期の人々の生態を読みとるのに恰好の作品だということになる。これととも、ノーベル賞にからめて論ずるのが若干脇道へそれるのと同様、小説の本筋からはずれる読み方ではあるけれども、この時期の作品に対する見方、ないしこの時期の小説があまり読まれないことの原因になっていることは確実である。しかし、小説というものの本来の姿から言へば、その時代の風俗ないし生態を描くことが本来的に基本になるということを考えれば、むしろこの時期の作品こそその本来の姿に則った行き方をしているということが言えるはずである。

第2次世界大戦が終って後、1950年代あたりから、イギリスの小説の新らしい動きが顕著になってくるが、ここで興味がある点は、それらの動きは1920年代を中心とする様々な新らしい試みが生成発展したというよりも、むしろそういう実験的な動きに対するためらいないし懐疑といったものである点だろう。伝統というと大袈裟ではあるけれど、そういったものへの復活あるいは回帰と言えなくもない動きがみられる。事実，“The line of modern realism that reached back to H.G. Wells and Arnold Bennett went through a period of recovery; John Wain, from the Potteries, acknowledged Bennett’s influence, and Margaret Drabble, whose first book *A Summer Birdcage* came out 1963, wrote a good book on him.”⁽³⁾とある。最後にある Drabble が書い

た Bennett に関する本は、彼の伝記のことであるが、ここにみられるように、第2次大戦後に輩出した新らしい世代の小説家が手本にしたのは、実は1920年代の実験的手法の小説ではなくて、1920年代の作家によって攻撃されたエドワード朝時代の小説家であったということは、面白い現象である。そして彼らがこういった小説家の研究を通して到達したのは“a conviction of the power of a stable realism”⁽⁴⁾であったということは、エドワード朝時代の作家の現代における意味というものを再考してみる十分の価値を考えさせられる傾向だといえよう。彼らにとって非常に不幸だったことは、彼らの前後の時代というか動向というものが、ともに人の注目を浴びる性格であったのに対し、先にも述べたように、いかにも地味であったし、もうすこし言えば、ヴィクトリア朝時代の小説の流れがいかにも大きなものとして感じられるため、それを背景にしたとき、どうしても比較されるという損な時代に存在したということが言える。あえて言えば、彼らとヴィクトリア朝時代の小説家との関係は、まさに、Edward VII と Victoria 女王の関係になぞらえられるような体のものであったと言えなくもない。

II

Woolf が、Bennett 以下3人を物質主義者と批判した“Mr. Bennett and Mrs. Brown”で彼女が具体的にとりあげているのは、周知のように Bennett の小説 *Hilda Lessways* である。この小説の第1章で、Mr. Skellorn 氏があらわれないので、Hilda が窓から西の方 Chatterley Wood を見ている場面を引用している。そしてそこに描かれているのは Hilda の周辺部分のことばかりで、肝心の Hilda 本人については、何も出てこない。いやなかなか出てこない。家の情景とか、土地の所有関係とか、そのほか細かいことは縷々述べられているのに、本当に読者が知りたいことはなかなか出てこない。“But we cannot hear her mother’s voice, or Hilda’s voice; we can only hear Bennett’s voice telling us facts about rents and freeholds and copy holds and fines.”⁽⁵⁾

きこえるのは、作者 Bennett の家賃や土地保有等の事実に関する声だけだという。

結局彼の描くものは、いってみれば登場人物ではなくて、その周辺にあるものはみているけれども、登場人物本人、人生、人間性の本質といったものは何一つみていないではないかという。もちろん彼らはそういったものを描くための技法を作りだしたし、それらは実によく出来ているけれども、それらはウルフ自身あるいは彼女の時代にふさわしいものではない。こういったものは、Bennett, Wells, Galsworthy といった作家の技法ではあっても、自分のものではないということなのである。“Mr. Bennett and Mrs. Brown”は1924年で、1925年に *Mrs. Dalloway*, 1927年に *To the Lighthouse* が書かれるわけだけれども、彼女流に小説を書くとどうなるかを、*To the Lighthouse* にみえてみると面白い。この作品の第1部「窓」は、Ramsay 家の別荘の対岸にある灯台へ行く前日の場面が描かれている。その第17章に夕方の Dinner の場面が出てくる。ここに集まっているのは Ramsay 夫妻、子供たち、そして招かれている人々である。その Dinner に出された食事なのだけれども、

...the flames...drew with them into visiblity the long table entire, and in the middle a yellow and purple dish of fruit.

...a maid carrying a great dish in her hands came in together.

...helping the Swiss girl to place gently before her the huge brown pot in which was the Bœuf en Daube—...

The cook had spent three days over that dish.

...she peered into the dish, with its shiny walls and its confusion of savory brown and yellow meats, and its bay leaves and its wine,...

とあるのみである。

ちなみに第17章の最初のパラグラフを引用すると、次のとおりである。

But what have I done with my life? thought Mrs. Ramsey, taking her place at the head of the table, and looking at all the plates making white circles on it. "William, sit by me", she said. "Lily" she said, wearily, "over there", They had that—Paul Rayley and Minta Doyle—she, only this—an infinitely long table and plates and knives. At the far end, was her husband, sitting down, all in a heap, frowning. What at? She did not know. She did not mind. She could not understand how she had ever felt any emotion or any affection for him. She had a sense of being past everything, through everything, out of everything, as she helped the soup, as if there was an eddy—there—and one could be in it, or one could be out of it, and she was out of it. It's all come to an end, she thought, while they came in one after another, Charles Tansley—"Sit there, please", she said—Augustus Carmichael—and sat down. And meanwhile she waited, possibly, for some one to answer her, she thought, ladling out soup, that one says.

ここに描かれているのは、ある事を契機として、Mrs. Ramsay がどう思っているかが述べられているのみである。例えば Paul Rayley や Minta Doyle が得たものに対し、自分はこの長いテーブルと器とナイフだけだといったことや、夫が顔をしかめているのをみては、何にそうしているのか、それはどうでもいいのか、夫に何も感じないといったことであり、また次々に部屋に入ってくるあいだにも彼女がしていることはただ何かが始まるのを待つといったことである。

こういった事情は、同様の調子で続く。考える主体が Mrs. Ramsay から他の人に移ることはあっても、全体のトーンは変化しない。Dinner に集まった

人々は如何なる様子をしていたとか、部屋の状態がどうであるとかいうことには言及されないし、読後に例えば Mrs. Ramsay が何を身につけていたかといったことを思い出そうとしてもわからない。Hilda を論ずるのに家のこと、土地保有形態のことなどに及ぶのとはいい対照を示していることは、一目瞭然である。このへんの事情は、Galsworthy の *The Man of Property* の第1部第1章の一部と比較しても明らかである。

1886年6月15日、Jolyon Forsyte 家でパーティーが開かれる。June Forsyte と Philip Bosinny の婚約祝賀である。

In the centre of the room, under the chandelier, as became a host, stood the head of the family, old Jolyon himself. Eighty years of age, with his fine, white hair, his dome-like forehead, his little, dark gray eyes, and immense white mustache, which drooped and spread below the level of his strong jaw, he had a patriarchal look, and in spite of lean cheeks and hollows at his temples, seemed master of perennial youth. He held himself extremely upright, and his shrewed, steady eyes had lost none of their clear shining. Thus he gave an impression of superiority to the doubts and dislikes of smaller men. Having had his own way for innumerable years, he had earned a prescriptive right to it. It would never have occurred to Old Jolyon that it was necessary to wear a look of doubt or of defiance.

Woolf が描いた世界は登場人物の心の中へ、即時、媒介を要せずして直接切り込んでいくのであって、そのために、他の物はいずれも必要最少限度に圧縮されているといえる。ここにみられる描き方は、常に登場人物の心に焦点をあてて、常にそこへむかって集中していく。連想は次から次へとひろがっていくけれども結局はもとにもどって心に集まっている。このことは、彼女が評論、“Modern Fiction” で保べた、無数の印象の原子が一人の人物にふりそそいで

くるということ、ある一人の登場人物に様々な事が次から次へと連らなってくるという考え方からすれば当然の帰結であって、同じように、*Mrs. Dalloway* の場合でもある1日少々の短い時間に限定して、そこにすべてを集中して徹底して描くというのとも同じである。*To the Lighthouse* の場合は、第二部及び第三部を通して10年の歳月を経過させてはいるけれども、実際は、前日の後半と10年後の1日の前半を結びにけるという形で結局は1日にしかすぎない。そこに凝縮された密度の話の展開では周辺の諸物を描くことはむしろ不自然になることは明きらかであろう。そういう手法をもって小説の新らしい行き方を考える作者の目からみるならば、Bennettを始めとする人々の小説はいかにも冗長漫散で退屈なものに写ったとしても不思議はないはずである。“Mr. Joyce’s indecency in *Ulysses* seems to me the consious and calculated indecency of a desperate man who feels that in order to breathe he must break the window”⁽⁶⁾にみられるように従来書き方では窒息してしまうので、それにかわる新らしい方法が是非必要だと考えた Woolf の小説はその意味で前に引用した部分にも示されるような姿になるのは必然の成り行きだともいえる。そしてその反対の相を示す小説が他ならぬ、Edwardian といわれる人々の小説であり、攻撃の対象となったのであるが、両者は同じ平面で論じられるかどうか問われてもいいはずである。

III

Woolf は前記評論において、Bennett の *Hilda Lessways* を中心に論じているので、ここでは Galsworthy の小説を考えてみたい。

彼の作品に、Forsyte 家に関する一連の小説群がある。即わち、*Forsyte Saga* にまとめられる3作、*The Man of Property*, *In Chancery*, *To Let*, *A Modern Comedy* を構成する *The White Monkey*, *The Silver Spoon*, *Swan Song* そして、*End of the Chapter* のもとに、*Maid in Waiting*, *Flowering Wilderness*, *Over the River* である。全体として、三部作の三部作という構

成になっている。その最後の三部作の最初の小説 *Maid in Waiting* は1928年3月 Sussex の Bury House に始まり、舞台は Palma, Biarritz, Hampsted, Auvergne と展開し、Sir Conway Charwell の娘 Dinny が主人公である。彼女は兄 Hubert が植民地でおこした殺人事件で苦境に陥ったのを救おうとして八方手をつくす。その解決をみるのが1930年10月。 *Flowering Wilderness* は、彼女と Wilfred Desert の恋愛問題を中心に Bury, Arizona, Hampstead, Austria, Italy に展開して1931年、最後の *Over the River* では Sir Gerald Corven の妻となっている妹 Clare の離婚問題を扱って1932年にいたるものである。ここでの Forsyte 家との結びつきはというと、主人公 Dinny の従兄弟、即わち、父親 Conway の妹 Emily と、Sir Lawrence Mont との間に生まれた Michael Fleur が と結婚することで生ずる。Fleur は、*The Man of Property* で登場した June の祖父、Old Jolyon の弟 James Forsyte の孫というつながりである。また Dinny が恋する Wilfred Desert は *White Monkey* で登場した詩人であるということも一応 Forsyte 家との関連といえはいる。しかし全体としてみれば、*End of the Chapter* は Charwell 家を中心とした物語という性格であって、その意味では、ここまでを時によって The Forsyte Novels と呼ぶこともあるけれど若干誤解を招きやすいと言えなくもないが、ここまでを以下の考察の対象とする。

これら9つの小説のうちから、先に、*The Man of Property* の冒頭の部分を引用したのは、Woolf が Bennett の *Hilda Lessways* について論じたことが Galsworthy の小説についても言えることの一例としたのであった。パーティーとなれば当然その部屋の様子とかその他集まった人々とは別に、その周辺にある様々な事項の描写が出るのは当然ではあっても、仲々本質にせまらないということになるだろう。そういうことを考えるならば、Woolf は Bennett の作品を引用した後、他の二人、Galsworthy と Wells をあわせて一括論じているけれども、それはそれで論理の展開に欠けることがあるとは言えない。何故なら、それぞれ性格とか題材とかは異なるとはいえ小説の作法ということになればこれら三人については、大同小異だと言えるからである。

事実、Galsworthy の今とりあげている小説群にしても、そのいずれをとっても、同じような例は各所にみられる。例えば *Maid in Waiting* に主人公 Dinny の両親及びその先祖のことが論じられているけれども、祖父の代までさかのぼる程度はともかくとして、1217年まで言及していることとかをはじめとして、そういう描写が出てくると、Woolf ならずとも少々退屈するということは言えるであろう。

しかしこれらの小説群を論じる場合に、上記のようなことを推しすすめていくことに、如何ほどの意味があるかとなると、これはまた別の問題であって、事の本質は別のところにあるであろう。

先に述べたように、Forsyte Novels は、1886年の描写から始まり、1932年に終る。その間に登場する人物は多岐に及んでいるけれど、そこで描く基本となっていることは Woolf 自身が指摘した次の事項にかかわっている。

Both in literature and life it is necessary to have some means of bridging the gulf between the hostess and her unknown guests on the one hand, the writer and his unknown reader on the other.⁽⁷⁾

hostess が集まった未知の人々を結びつける共通項として、気候の話とかその他あるごとくに作者が未知の読者をひきつけるのもそれなりの共通項が必要で、遠まわりのようでも、それらを介して次第に読者を引きつけてくるというやり方は一つの手法として有効であって、これらを用いて、小説の各要素を結びつけて1つの小説を形成していくということは十分に考えられる方法である。従って、ここで Galsworthy の場合もそうであるけれど、彼が考えているのは、そういった細かい事項を一つづつたんねんに積み重ねていくことによって一族の数世代にわたる、そしてそれが別の世代へつながって更に広い世界に発展させていく小説となって完成していくという図式が考えられている。別に言うならば、彼がこれらの小説群でかこうとしたものは、個々の人物のそれぞれの性格その他はもちろんとし、それを含めたもっと大きな世界であったことは明

きらかであり、こういった世界の描き方は更にいいかえるならば、歴史観の一つとしてある個々の細かい事実の積み重ねによって歴史が形成されるという立場で歴史をみることと同様のことだと言える。もしそうだとするならば、これは最初から Woolf 等とは小説の描き方の質は異なるわけで、ある局部に限定してそこを描こうとすることは、また別の方法なのである。Lytton Strachey は *Eminent Victorians* の序で、“He will attack his subject in unexpected places; he will fall upon the flank, or the rear; he will shoot a sudden revealing searchlight into obscure recess, hither undivided” と書いた。Woolf の小説はこの方法の小説への応用といえなくもない。

Bennett について、Woolf は *Hilda Lessways* をとりあげているけれども、彼の他の作品、例えば、*The Old Wives Tale* について言えば、Constance 及び Sophia 姉妹を2本の柱として、Bains 家を中心とした物語であって、この話自体は2人の人生の軌跡をたどることによって終結して、特にそれが数代に及ぶとか、他の一族に及ぶという発展はしていないけれどもその契機は内に十分含んでいるわけだし、また、*Clayhanger* についても、話は主人公の Edwin Clayhanger の人生でとどまってはいるけれど、これととも、その中には Hilda Lessways との関係があって、他の発展の可能性を含んでいることは一見して明きらかといえる。

Galsworthy の小説にもどるならば、その基本はこうである。即わち Forsyte Novels についてその枠組というよりはその基礎構造に、ヴィクトリア朝後半から、今世紀初期の社会、特に Upper Middle のそれという確固とした基礎構造がすえられている。そして、その基礎の上に作りあげられた物語は、*Forsyte Saga* についていうならば、*The Man of Property* での Somes Forsyte, Irene, Bosinny の話であり、*In Chancery* では Somes の従兄弟 Young Jolyon, Irene の結びつき、Somes と Annette Lamotte の結婚と娘 Fleur のこと、*To Let* での Fleur と Jon の恋や、最後に実現する彼女と、Michael Mont との結びつきといった話が展開されるわけだし、*A Modern Comedy* では、*The White Monkey* での Mont 一族と Fleur, Wilfred Desert の恋と、Somes

の生き方、*Silver Spoon* での、Michael Mont の政界進出や Fleur と Marjorie Ferrar との確執、*Swan Song* での Fleur と Jon の再会と Somes の死、そして先に述べた、*End of the Chapter* での Dinny を中心としてくりひろげられる Charwell 家の物語という構成はその基礎となるイギリス社会の種々相の描写と相まって、どの方向へ発展していくにしても安定があり、決してくずれる心配のないものである。このように確固とした基礎のうえに築きあげられた物語には、いかなる方向への発展も十分可能でありまたそれがあることを十分に予想させるものでもある。読者はこの小説を読みながら常に安心して楽しむことが出来るうえに、目前に次々展開されてくる物語風景を堪能するよろこびを得ることが出来るのである。それはそのもとに、やはり安定した基礎が置かれていると同時に読者と作者の間を架橋する共通項があって、それが同時に安定した基礎のうえに成り立つ小説の元とでもいべきものをしっかりと結びつけているからであり、それによってはじめて可能となる。また、この基礎のあることによってどの方向へも発展することが可能なのである。もしそういった基礎も共通項もなければ、おそらくこれらの小説は途中で自壊作用をおこして崩壊してしまうであろう。そうならないのは、一見退屈にみえる様々の項目がしっかりと全体を結びつけ、固めることに役立っていて、むしろそれがあることによって、全体の強さが一層増しているといった方がいいかもしれない。

IV

Galsworthy の Forsythe Novels について言えば、約50年にわたる歴史的事実という基礎のうえに組み立てられた構築物ということが考えられる。この基礎部分は、読者にとにかくも共通のものとして認識されているわけであるし、そのために共有物として受け入れられるし、またそれ故に安定感がある。従ってその上に展開される物語、あるいはその上に物語を展開しようとした場合は、それを次々と発展させることが可能となる。実際この物語では、前述のごとく *End of the Chapter* に含まれる3篇の小説は、むしろ Forsythe 家の物語と

いうには若干誤解を生じやすいとしても 9 篇の小説を全体としてみた場合は、破綻なく調和をとって収まっている。また読みながら、この部分にきて、突然異質なものになったという気持にならず読みつづけることが出来る。我々は、一応名前をつけてはいるけれど、それは一つのまとまりを与えようという本能のようなものの作用が加わって一つの全体像を作り上げるために呼べばそのようになるわけであり、そしてそうすることが出来るのは、その基本に一つの安定した共通項があるからこそ可能であるともいえる。これらの小説にみられる特色は、常に生成発展を続け、四方八方へとひろがっていく性質の作品だということである。そのためには、次々と広がり発展し、拡大していく構造物が崩壊しないために、それをささえられる安定した基礎がなければならないということであって、その基礎を確固としたものにするものが19世紀以後、前代の作家が作りあげてきた小説の技法にほかならない。この存在を抜きにしては彼の小説は考えられないし、またその技法によって固められた共通項こそ彼の小説の中核をなすものとして考えられなければならない。安定した共通項という言い方をしたけれどもそれが伝統という物の本質であり、意義であらう。第2次大戦後の作家が Bennett にせよ Galsworthy にせよ、彼らから影響を受けたということ、伝統への回帰ともいえる作風の小説が書かれるのも、このような事情を考えれば、理由のないことではない。

ひるがえって Woolf について考えるならば彼女の小説は、ある歴史的時間の流れの一部を切断し、そこを舞台とし、その枠組の中で人物のありようを次々と分割していく。物質の本質の究極にあるものはなにかを追求した科学者にも似て、ここでは登場人物の心の動きを次々と追求し、奥の奥までつきつめていく。彼女がいみじくも言った原子にまで逆のぼっていくわけであり、そのためにはここにもやはり一つの枠組がなければならない。その意味で、例えば *To the Lighthouse* にみられるような一日の設定が必要になる。この枠組を作らないと、あるいは逆にこれを取りはずしてしまうと、それこそそれぞれの原子は四方八方へ雲散霧消してしまうであろう。いわば小説の元とでもいうべきものを一つにまとめておくためにも枠組は必要なのである。このことは強固な

基礎なくしては、次々と生成発展する大建築物にも似た物語が、自壊作用をおこして崩壊してしまいかねないのと、方向は逆であっても同じ作用をしているといえる。この枠組があればこそ登場人物の本質をなす原子は自由に遊泳して我々の前にその美しい姿をみせてくれる。Woolf はまた、Atom の Shower と言うこともいうけれど、それらのいってみれば受け皿としての一つの枠組ということも可能なのであって、それなくしては、雨が大地にしみ込んでしまうように我々の目の前から消えてしまうであろうし、大海に落ちた一滴のように、たちまち全体にのみ込まれてその存在はわからなくなってしまうこと必然である。なるほど無数の原子とはいっても、それは常にある枠組によって焦点を保っているのであり、常にその枠組を求めて、あるいはそこに集まる形で示されるのであって、別の言葉でいえば Galsworthy とは方向を逆にする運動であると言える。

このように、両者の基本的態度は、根本的に相異なるのであって、この場合その両者についての優劣はつけ難いであろう。言ってみれば双方は土俵を異にするのであって共通点がない。Woolf が Bennett 以下を批判するとしても、そのためには、彼女のよってたつ立場から批判したのでは平行線に終るのみである。

もっとも、Woolf の考えている、あるいはとらえている人物は、非常によく本質を突いているところがあって、その意味では、彼女の小説は訴えるところがある。もし小説の本来の姿が、あるいは小説とは認識の拡大であると考えれば、即ちそれまでにない新しい世界を読者にみせてくれることにありとするならば、その目的を十二分に達成しているということは出来るし、それ故に魅力のある小説であり傑作だとも言える。ただこの類の小説の性質からしてが Galsworthy 求める小説の枠組とは異なり、どうしてもスケールという点で若干の不満を残すことは否定出来ない。

このように、相異なる2つの方向をもった小説について考えてみると、その基本的性質をいくつかの型で考えてみるのがよいと思われる。Galsworthy の小説が、発展的であるということは、とりもなおさず、無限大への拡大方向を

もっているということに他ならない。あるいは常に上へ上へと伸びてゆく高層建築物のようなものとも言い得よう。とにかく基礎は強固にかたまっているのだから、そこにいくらでも積み重ねることが出来るし、場合によってはその基礎を多少拡大していけば更に高いものへと変化させることが出来る。もっとも読む側としては、あまりにも大きくなりすぎたものはいささか全体像をつかみにくくなるという欠点になる危険は生ずるとしても、この種の作品が雄大なスケールをもつことの魅力は何物にもかえがたいということになるろう。これに対して Woolf の場合は、無限小への細分化であって、それによって無限の切口が我々の前に展開され、小さなまとまりの中での無限の変化というこれまた面白い世界がみられることになる。 Brilliant Cut の宝石をみるに等しい効果、光りかがやく多数の面をもったダイヤのような小説とでもいうことが出来る。ことに全体像というかその姿が一見みてとれるというなかでのあらゆる相の展開という方式は、読む側に容易に小宇宙の存在を感じさせることが出来るし、常に全体との位置づけを知りながら読むことが出来ることによってまとまりのある世界の認識が可能だと言える。

もし次のような言い方が出来るとするならば、一方は遠心的な小説であって、常に外へ外へとむかっていくのであるが、他方は求心的なそれであって、常にある範囲においてまとまって、その中心にむかって集まってくる性格をもっている。その両様の小説が具体的姿をあらわすと、片や Galsworthy その他の伝統に従った小説であり、他方は Woolf にみられる新らしい形をした小説であったということになる。エドワード朝の小説家にとって不幸であったことは、彼らが書いていた時代が、ヴィクトリア朝時代に続く時期、一つの伝統が大きく出来あがった直後に続いていたという事情があったため、そのことは決して彼らの小説の価値を無にするものでなかったことは明きらかであるし、それは第2次大戦後の諸作家の動向を考えても明きらかだと言える。

注

(1) John Batchelor, *The Edwardian Novelists* (1982) p. 150.

ウルフとゴールズワージー

- (2) Edwin Muir, *The Structure of the Novel* (1928) p.117.
- (3) Malcolm Bradbury, "The Novel No Longer Novel" *No, Not Bloomsbury* (1987) p. 105.
- (4) Ibid.,
- (5) Virginia Woolf, "Mr. Bennett and Mrs. Brown" *The Captain's Death Bed and Other Essays* (1950) p.103.
- (6) Ibid., p. 109.
- (7) Ibid., p. 104.